



Title	『農政學講義』：渡邊侃先生の新著
Author(s)	伊藤, 俊夫
Description	紹介
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 5, 181-184
Issue Date	1937-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10647
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_p181-184.pdf



紹介

『農政學講義』

……渡邊 侃 先生の 新著……

伊 藤 俊 夫

一

農業恐慌を契機として、その事實の分析と批判が要請され
ると共にその克服策としてわが國農業の資本主義段階に於ける
基本的關係の究明がいよいよ重要とならざるを得ない。

昨年以來の重要文獻を見ても澤村氏の「農業團體論」戸田
氏の「日本農業論」高岡博士の「第三農政問題研究」東畑氏
の「日本農業の展望過程」小野博士の「日本村落史概説」河
津博士の「農業と農業政策」などがあり、産業組合方面に關
しては八木博士の「農村産業組合の研究」本位田博士の「協
同組合研究」を始めとして實に夥しい數にのぼつてゐる。又

報徳思想に關する著書も農村更生運動と關聯して枚舉に遑の
ない程である。然し乍ら、理論は終局に於て社會の實踐の指
導力となるべきものとすれば、個々の分野の開拓も必要では
あるが、正しい理論の上に立つてわが國農業の指導方針を明
示する體系的著作の必要なることは一層緊急のことといはな
くてはならぬ。その意味で上述せる東畑精一氏の著書の如き
は寔に透徹せる論理の分析に教へられる點はあるが解り易い
ものとはいへない。

然るに昨秋公にされた渡邊助教授の新著「農政學講義」は
著者自らその序文に述べられた如く、「最近本邦の農政問題と
農業經濟學界の諸研究を吟味し、農政問題を批判する體系を

整へ得たものにして而も行文平易にして理解し易く、之を江湖に推奨するに躊躇しない。

二

本書の構成は第一篇總論に始まつて第六篇農業教育論に終り、其の間に章を分つこと三十二、總頁二六三頁、それに索引五頁が附せられてゐる。

第一篇は標題の示す如く總論であつて、第二篇以下は各論と看做すべきものである。第一篇には農政學の職分、農政の客體、農業經濟界の變動、農政の主體、政府農政機關、農業團體、産業組合、株式會社たる特殊銀行の八章を含んでゐる先づ著者は農政學の概念を農業界を統制する政策なりとし、統制なる言葉は全體としての調整の意味であるとされてゐる次に農政の客體たる農業社會に關しては農業生産の有機的生産であること、農村生活の都市生活に比較しての不利の存すること、現在の農業の種々なる自然的社會的制約による不利即ち農村窮乏の一大原因は地代の支拂にあることを明かに述べてをられる。

猶この章の最後には、農業經營と農政との關係が論じられ基礎として農業經營を考慮し農業社會内及び他産業との併存關係を考へねばならぬとする。茲で著者は「經濟の窮極的形態を勞作的なるもの」と考へ、所謂資本的大農制を却けると共に、普通小農主義者にあり勝な「所有の桎梏」といふことに慚らず民主的組合主義をほめかされてゐる。

右に述べた農業社會は決して一定不變のものではなくして常に動搖しつゝ發展するものである。農業恐慌といふ現象もこの運動の一面にすぎない。著者は第三章に於て簡單にその説明をされてゐるが一般的恐慌が世界的なものでなければならぬと言はれる反面に、之に對する政策は、永久的に最もよいのは自由主義であるとされるのは歴史の發展を少しく樂觀されたものでなければ、理想としてのそれであらうか。現實にはさういふ樂觀は成立し得ないのであるまいか。

*

第四章では、以上に述べた農業社會はどういふ風に統制されなければならぬか。それを統制するものは何かを論じてゐるが、その統制原理は完全なる統制を主張するのではなく寧ろ緊急的統制を伴ふ自由主義とでも言ふべきものである。第五章以下の四章は統制主體としての種々なる機關の職分、現狀を論じたものであつて何れも要を得た説明である。

三

第二篇は農産物統制特に其の價格統制と題するものであつて、著者の最も得意とする數理統計的研究が到る處に挿入されてゐる。その内容が百頁以上を占めてゐることによつても本書に於けるこの篇の重要性は看取せられるといつてよい。而して先づ第九章では價格原理として、價格の季節的變動、需要供給と價格變動が論述される。農産物價格變動の大きいのは著者に依れば需要弾力性の少いことであり、尙此の彈力

性を以てイジキールの複相關係式の回歸係數と考へることが出来る。著者はこれらの複雑難解な原理を比較的平易に代數式乃至は幾何學的に説明を試みられると共に、マーシャル的な立場より經濟均衡の問題を闡明され、具體的例證を内外に求めてゐる。米の需要の弾力性を收入階級による米の消費の差等より推定しやうとしたのもその爲に外ならぬ。

以上の價格決定の理論は主として米を以て説明されてゐるが、米に於ては米生産者たる農業者以外に於ては需要弾力性甚だしく、これに反して農家の米の供給弾力性は著しく大きく米價統制の困難なる事實を示してゐる。又以上の如き比較的短期間でなく長期間の變動にも觸れ、長期間には、價格と生産費とは一致すると云ふ見解に論及して米生産費調査の内容を吟味し、生産費の理論を展開された。そして農産物生産費計算上に於ける自家勞働賃銀の算出は農家生計費を以てすることの理論上絕對的乃至相對的に認めらるべきものとされ問題はその方法的困難にあることを指摘された。

*
上述せるところより明かな如く價格決定の原理は數理統計的に、又は均衡理論から説明せられ、その叙述の精緻濃厚なるは言ふ迄もなく獨自の見解すら發見せられるのであるが、第十章價格統制の原理はあまりに簡單に過ぎはしないかと思ふ。こゝでは著者は價格統制を單に歴史的に一瞥してゐるに止まり、直に米穀政策、米穀專賣問題、蠶糸政策に移られてゐる。しかし乍ら第十四章特殊農産物に對する政策、第十五

章生鮮農産物政策を讀むことによつてその不満は償つて餘りがあると言ふことが出来る。特に第十四章は北海道に於ける特殊農産物たる茶豆類、青豌豆、燕麥、馬鈴薯澱粉、除虫菊薄荷等につき、一般物價の影響、輸出の關係、生産と價格の關係、恒久的價格統制策が具象的に極めて明快に論じられてあり、本章を一讀しただけでも本道農業の趨勢が把握されると言つてもいい。第三篇では農業に對する課税及び補助、農業者の負擔が叙述され、第四篇では農業金融や農家負債整理などの當面の農村問題が取扱はれてゐるが、何れも一般的概念を把握するに便利である。第五篇は第二篇に次ぐ分量であつて、著者のこの方面に於ける蘊蓄の淺からぬことを物語るものであり、特に土地割替制に對する見解は往年奥田瑛氏の林野割替制度の批判のうちに鋭く主張されたのであるが、税制と地割との直接關係に疑問を投げられる著者の立場は聽くべきところが尠くないであらう。

*
著者はアーレボーに従つて大體小作制度の必然化を認めると共にまた自作農創設維持にも賛成されてゐるが、その方法として小作權の確定を前提條件とされてゐるのは進歩的な思索の結果であると考へる。最後の一篇農業教育論は農事指導事業、最近農業教育運動、本邦農業教育制度の發達などを簡單に考察したものであつて、其の所論の多くは肯綮に當るものであると信ずる。

四

以上は本書の結構の極はめて概略的な紹介であるが、個別的な部分の紹介は紙数の都合上いまま差控へざるを得ない。本書全體を通じての特色は数理統計的研究に基く體系的なところに有するが、其他幾多の記憶すべき特色がある。必ずしも豊富ではないが、文献の適切崭新なる——ケーンズの新著の引例の如き、著者の創意に成る統計圖表、北海道の農業事情の如き日常われ／＼に最も關係深き諸問題——有島農場の如きもの一つ——など注目すべきものがあるが、附録的に取扱はれた問題にも見逃すことの出来ぬ貴重な學問的價値がある。例へば農業恐慌と通貨問題、第二篇附録などの如し。

終りに花み本書について二、三の問題を提出すれば、著者に於てはプロテスタンチズムの自由主義の色彩が濃厚であつて、經濟現象をその立場より把握する結果、統制せらるべき理想形態が措定されず、資本主義組織の問題は間接的にしか論及されぬ。従つてこの態度は生産關係の分析には立ち入ることを避け、ひたすら流通部面たる價格の原理に志向することになる、而も價格統制の原理に積極的に何者をも聞く事を得ないのは以上の觀點への省察の乏しいによるものではあるまいか。

又著者の勞作主義と自由主義との不可分離的關聯も理論的に十分説明されてゐない憾がある。猶恐らくはこれは最も重

要なことと思ふが、思想體系に於て總論的なもの、有する存在理由はそれ自體としての裡にあるが、それに次では各論的なもの、間に其れが如何に生き延びて行き、如何に具體化されてゆくかと言ふことである。この點より再び本書の意義を考へるとき、若干の疑ひを持たざるを得ないものがある。例へば農政の主體たる産業組合が價格形成や統制に於て如何なる役割を演じつゝありや等の問題は明かにされてゐない。

それは兎もあれ、本書は著者十年の學殖研鑽の結晶である。刻下の農政問題の解決に寄與するのみならず、經濟學理論の領域への興味をも與へる好著である。

私は本書を早世したる弟妹に贈られた基督教的信仰の人たる著者が、本書の姉妹書たる農業經營學に關する勞作を一日も早く上梓されん事を祈つてやまない。いく重にも加筆を祈るものである。又文中著者に對する非禮の言辭はこれまた切に御寛恕をこひねがふものである。

發行所 養賢堂書店

定價 二圓八十錢